

九十九里浜聞書

—千葉県山武郡九十九里町—

恵津森智行

納屋集落で有名な九十九里町は、隆起した海岸平野の一般性として砂堆と低湿とが汀線に平行した伸長形態をとる。つまり海岸に平行して集落、道路、水田、林地、畑地が列状に並んでいるわけである。(註)

近世からの排水干拓により、砂堆の間の低湿地で田畑の耕作が盛んになる。不漁期には網元が地主、水主が小作人を兼ねるようになった。

徳川家の江戸開府とともに紀州漁民の出稼ぎがあり、紀州の漁撈技術が導入され、大地曳網の完成などの漁業の発達と鰯の生産で有名である。最高漁獲高の鰯は、大部分が干鰯となって他地方に移出され、農作物の肥料となったり、浜松などの養殖うなぎの餌となっていた。しかし年々化学肥料・飼料が増え、その需要は減少しつつある。次に鰯、鯛と漁獲高が続く。

最近、観光事業として民宿の数が増え、庭木栽培とともに九十九里町発展の基盤事業となりつつある。

ムラの中には、第1～6までの常会があり、1つの常会には3つの班がある。班には1年任期の班長が選出され、3人の班長の中の1人が2年任期の常会長となる。班長、常会長は網元とは何ら関係なく選出される。また、15、6歳から嫁のもらうまで参加する青年会があり、主な仕事は夏の海水浴場の見はりなどである。

大正時代頃まで20ぐらいの網元があり、いくつかその屋号をあげると、アブラヤ・イッカリナカマ・エドヤ・オワリヤ・キョウド・クガ・ゲンシチ・コダヤヨリアイ・コロウドン・チョウシマツヤ・ハヤフネ・などであり、草分けとしてはゲンシチがそうであろうという。

水主には、シヨク・メカリがあり、自作農であるメカリは世帯持ちが多く、世帯持ちの少ないシヨクは、定住者もあるが多くは他地方からの出稼ぎ者と流れものとかであった。シヨクは11月から翌年の6月まで8カ月任期の日雇いで給金は日給制である。この給金はかつて網元が漁業組合に集まり決めてい

たが、昭和5・6年から水主も議決員として加わり、現在は組合が指示する。メカリには給金は出ない。というのは漁獲高の4割から漁獲高の多い場合は6割を網元が取り、残りの1割がショック、9割をメカリが取るからである。

水主の休み日は、正月と盆の15日であるが、その他に悪天候など不本意な休みがある。この時ショックは、網元の家で網その他の漁具の修理をし、不漁続きなど長期の場合は、地主でもある網元の田畑で小作をしていた。不漁になっても米が食えなくなったことはないらしい。また普段でもショックは、食事は網元のところでとっていた。ショックは任期が切れるとショックオリといって、網元の家で酒とごちそうを振舞われた。

水主の他にオッベシといって船を押す人がいて、これは近所の婦人達が1人いくらといって雇われ、地曳網のときにも雇われた。先述したように現在の地曳網は観光用である。大正期には15の協同大地曳網が行われて1網80～100人ぐらいで曳かれた。

かつて船は、片貝地区にも船大工がいて造られていたが、現在では銚子で造船され運んで来る。昭和35年に網船の代金は、トンあたり1万5千円位であった。2双1対で3～4カ月かかる。簡単な修理は仕事の合間にショックの連中がする。網は、7つの村があるので七浦とも呼ばれている豊海のシバミセから、網は銚子のツナギンから購入する。船が造られるとフナヒキバシヨといって、県から船を置く場所の許可を得る。潮の引きの早い所をミナクチといって船を早く、楽に沖へ出すために利用するが、ミナクチとの関連においてフナヒキバシヨを選ぶ必要はない。というのは、ミナクチは風の向きによって移り、船を出す場合には小さい船から先に出てロープをつなぎ順々に大きな船へと沖に出ることができるからである。

漁獲高が最高のいわし漁は、朝の4～5時頃船を出す。いわしの群を捜すのはヒトの目に頼り、船の舳先に頭を出し海面を伺う。いわしがいると、泡がよく立つ・海の色がいわしのために赤くなる・ハネといっていわしがよく跳ねる・トリワケといって鷗が群飛んでいるなどという。漁場は決っていて、今日はとれなくとも明日はとれるなどという。日によっては漁場を変える場合もあるが、だいたい漁獲量が一定しているので希である。

造船したときに祝儀としてもらい、漁に出る時は必ず船にのせておく大漁旗

は、大漁の時陸にいる人々に知らせ、陸上げの準備をさせた。現在大漁旗は、無線に替わり船の装飾としての役割に変わった。

地曳網をするには、2双の船で網を出すわけであるが、右側が船長が乗るオキアイで、左側をサカミブネという。沖では他の地曳網の船と場所とりの喧嘩をすることもありヤリを使ったりしたが、仲間の船が仲裁に入った。先述したように陸では80~100人ぐらいの人数で引き、馬まで使った。この馬は馬車屋というのがあり、主に魚の運搬を商売としていた。地曳網の大きさは、その網元の勢力を表わすものだったという。

海がシケたりその他で漁ができなくなる日には、潮が引くと水主達がハマグリとりをした。これは浜の権利がなく、誰がどこへ入っても自由で全部個人の収益となった。

船長は、網元の兄弟・子になるものであるが身内に適当な者がいなければ、水主の中から勝れた者が選ばれた。船長になるまで30年かかるといわれ、始めは飯たきからやり運がない人は生涯下働きをすることになる。また船には水主として親子・兄弟で乗ることが認められている。水主の家は長男が継ぐことになっているが、実際には次男・3男が継いでいる場合もあり、分家も可能である。

船が遭難した場合には村全部の船が出て、夜を徹して捜し続ける。もし亡くなった者が出れば、その家族を2・3年網元が面倒をみてやるという。

正月2日には海に船を浮かべてデゾメシキをする。網を繋ぐ真似をし、いわしを入れるタマにオソナエを入れていわしを入れる真似をする。それからアグマリといって、3回輪を描く。アグマリが終わると男女別々に集まり、網元の家でごちそうをいただく。

漁士は毎日の天候を大切に、特に網元では人の命を預かっているというのでたいへん気を配るという。例えば海の音を聞いて、南が鳴れば南風・北が鳴れば北風が吹くといい、これはいわし漁に大切な意味を持つ。寒のうちのバカヌックイ日は雨が降るとか、海の音が急に止まることがあり次の日は風が強いなどという。

船によって漁の良い船・悪い船があり、普段良い船には40人位の水主が乗り込み、悪い船には24人位しか乗り込まない。これは船長の腕によるものも

あるが、その船の運によるものだから仕方がないなどという。

オフナダアサマは造船した際に買いもとめ大工が船に納める。この中にはサイコロが2個・お金が12円・女の人形が入られる。サイコロの置き方はテンイチ　ズロク　オモチニサガナミ　トモシアワセ　トリカジニッコリ　オモカジグッサリとって、上に1の目をみせとりかじに2の目をみせるようにする。このオフナダアサマの他に女の髪とオシロイを船にのせるという。これらの作意は、船の神様は女だからだという。

詳細はわからないが現在、飲食店でエビス講が開かれ、かつては水主がその船の網元の家に集まりごちそうになったといわれる。アンバ様の話は聞かれなかった。

現在漁業が伸び悩み、干鰯などの需要が減ってきた。網元や水主の中には海を捨て、収入の良いビニールハウス栽培や庭木栽培などに転職した家が多いという。庭木栽培などに早くから着目した家は成功しているといい、あまり土地がなく、農作物を換金できない家では勤めに出たり、土地を売ったりするという。ここ10数年あちこちで不動産業者の土地購入の話聞くという。

しかしながら、まだ主漁従農であった時代のことについては先述のように漁ができなくとも田畑を耕作することができたので食糧的な面からみれば安定した生活を送れたようである。耕地を持たないショックの場合でも、浜を出てしまうと職がないというのも事実であったらしいが、網元についていけば食うには困らなかったという。昭和11～13年頃は、大工や左官などの職人までがショックになったという。

註) 中野 尊正 「日本の平野」 1956.11.など。